

研 究 分 野	資源評価	部名	調査普及部
研 究 課 題 名	シジミ資源管理対策調査事業		
予 算 区 分	県単		
試験研究実施年度・研究期間	H.14 ～ H.18		
担 当	長崎 勝康		
協 力 ・ 分 担 関 係	小川原湖漁協、十三漁協、車力漁協、八戸水産事務所、鱈ヶ沢水産事務所		

〈目的〉

小川原湖と十三湖のヤマトシジミ（以下シジミ）の現存量、成長、発生状況等を調査することにより、シジミ資源の実態を明らかにし、効率的資源管理対策を確立することを目的とする。

〈試験研究方法〉

現存量調査：エクマンバージ採泥器（15×15cm）を使用し、小川原湖（89 地点）、十三湖（41 地点）で1 地点2 回ずつ採泥を行い、1mm 目合いのフルイに残ったシジミをサンプルとして測定した。

成長調査：個体識別用マークを施し、蓋付きカゴに収容し、成長を追跡した。また種苗生産により得られた稚貝の成長追跡を実施した。

〈結果の概要・要約〉

現存量調査結果：小川原湖（図1）

- シジミの推定現存量は、2002 年約 30,000 トン、2003 年 22,000 トン、2004 年 16,000 トン、2005 年 14,000 トンとなり、この3 年間で現存量は半分以下にまで激減した。
- 2002 年～2004 年には小型貝は見られなかったが、2005 年は殻長 2～5mm の小型貝にピークが見られており、これらは2004 年級群と考えられた。
- 2004 年級群は、塩分が夏場に上昇し産卵条件が整ったために大発生したものと考えられる。

現存量調査結果：十三湖（図2）

- シジミの推定現存量は、2002 年約 4,800 トン、2003 年約 6,800 トン、2004 年約 12,700 トン、2005 年 11,200 トンとなった。
- 2005 年は例年より調査時期を1 ヶ月早めていることを考慮すると、2004 年の現存量とほぼ同じ水準と考えられ、2004 年以降のシジミ資源は比較的安定した状態にあると思われた。

成長調査結果（図3、4）

- 開始時殻長 6mm 以上の個体では、小型の個体ほど殻長の伸びが早い傾向が見られた。
- 小川原湖のシジミは、発生した年の秋までに殻長 0.5mm 程度に成長し、そのサイズで冬を越し、翌年5 月頃から再び成長していた。

〈今後の問題点〉

小川原湖では、2004 年に夏場の塩分が高くシジミの大量発生が見られ、資源は回復傾向にあるが、シジミの発生は塩分に左右されており、再生産に関して常に不安定な状態にある。また、十三湖では、蓄養場における潜水鴨による食害が問題になっており、実態把握等必要と思われる。

〈次年度の具体的計画〉

- 平成17 年度と同様の現存量調査、成長調査を実施。

〈結果の発表・活用状況等〉

- 小川原湖と十三湖において関係機関、漁業関係者に対する報告会を開催。
- シジミ漁業管理（漁獲量制限、禁漁期間・区域設定等）を行うための資料として活用。

〈主要成果の具体的なデータ〉

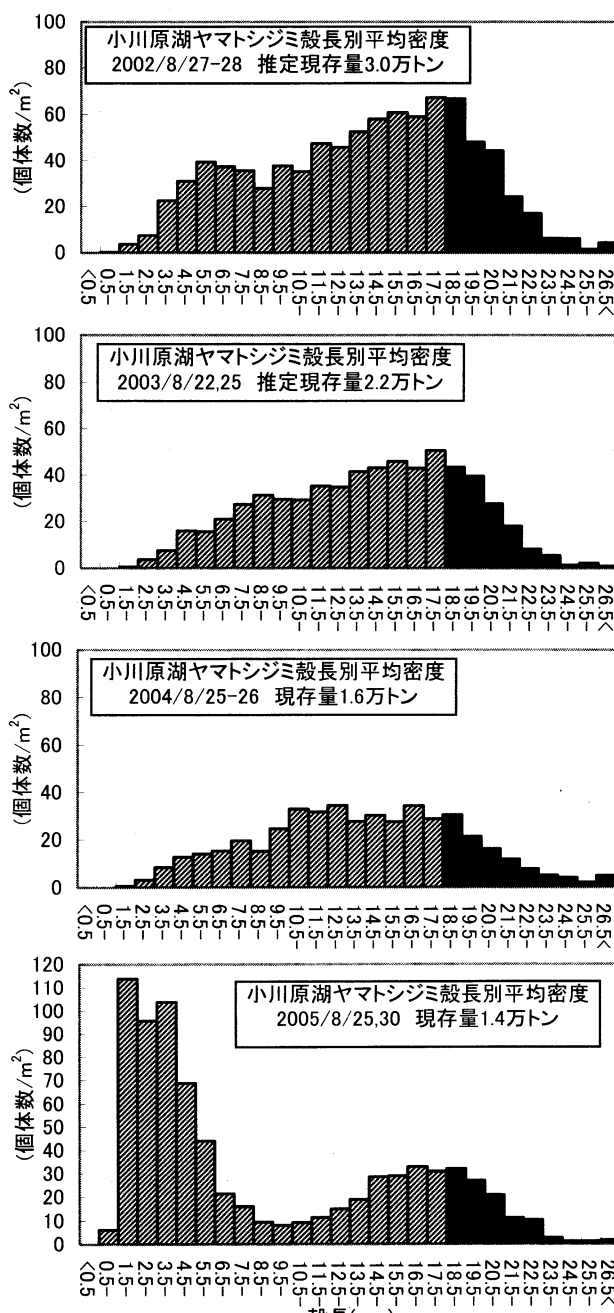


図1 小川原湖のヤマトシジミ現存量調査結果
(2002～2005年)

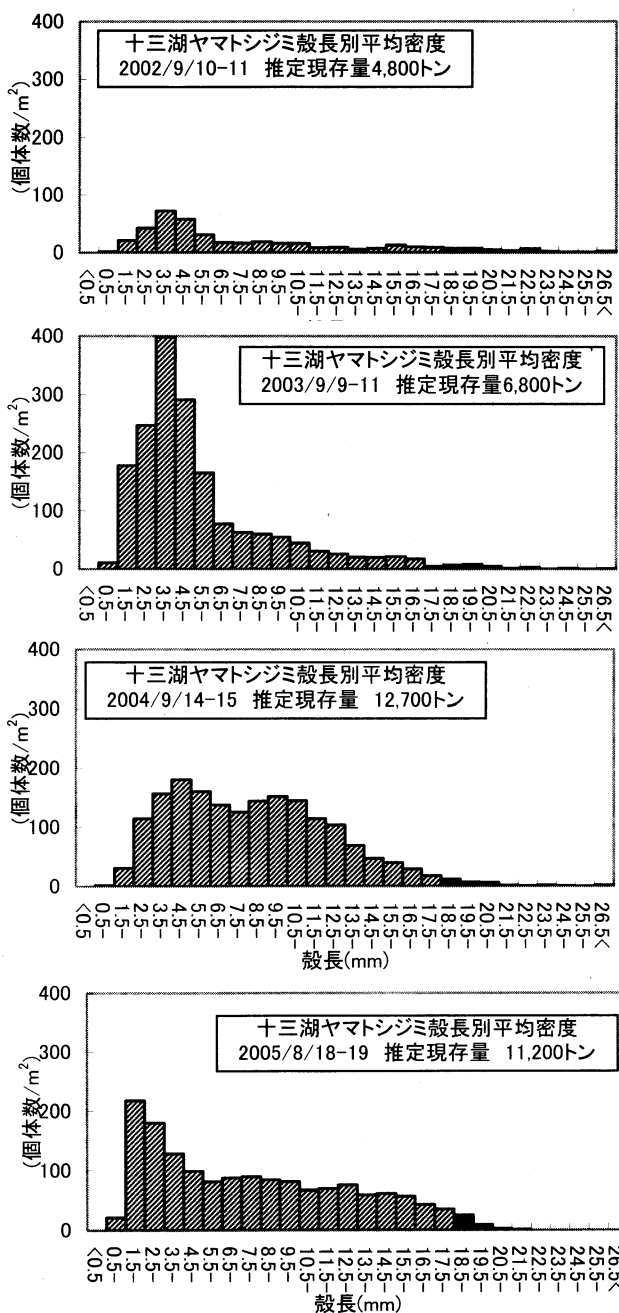


図2 十三湖のヤマトシジミ現存量調査結果
(2002～2005年)

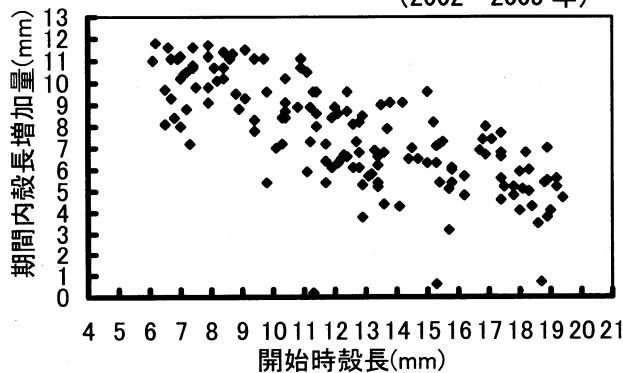


図3 小川原湖南部のヤマトシジミ成長調査結果
2005/6/2-2005/9/26

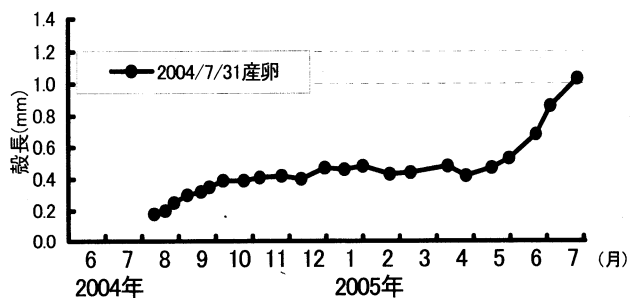


図4 小川原湖の種苗生産シジミ成長追跡結果
2004/7/31-2005/7/21